第６学年 総合的な学習の時間　　ESD 学習指導案

生駒市立生駒東小学校　教諭　竹田　光陽

１．**単元名**　　当たり前を、当たり前と捉えない自分になろう

２．**単元目標**

・　世界には貧困の中で生活している人々がいることに気付き、その背景や要因について調べようとしている。（知識・技能）

・　世界における学校に行けない子どもたちの背景などに着目して、日本との違いから課題を把握して、その解決に向けた自分の考えを表現する。（思考・判断・表現）

・　学校に行けない子どもがいるという課題について、解決方法を構想したり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）　教材観

本校の特色として、地域の協力体制ができていることや、校区の周りに生活に必要なインフラが整っていることから、様々なことが地域の中だけで完結してしまう現状がある。そのため、校区外や、日本全国、世界に目を向ける機会や、自分達の生活以外を知る機会が少ない。

本単元では、日本以外の国の子ども達の生活を見つめることを通して、児童の視野を広げ、新しい気づきを生むことができる。また学校に通う意味を考える中で、「いつから学校に通うことになったのだろうか」「私たちは、今どうして学校に来ているのだろうか」などのように、これまで当たり前だと思っていたことを、改めて見直すことを促すことができる教材だと考える。

児童にとって同年代の世界の子どもたちの生活を見つめる学習から、「どうして自分達とは違う環境に生きることになったのだろうか」という問いを生み出し、置かれた環境の違いから、世界における絶対的貧困の存在や実態に気づくことができる本教材は、本校児童にとって適したものだと考えられる。

これらの教材を通して、「自分」は、たくさんの方々によって支えられ、当たり前だと思っていた生活が、当たり前ではなかったことに気づくことができる。

（２）　児童観

本学級の児童は、大変意欲的に学習に取り組む姿が印象的である。また、何事に対しても「なぜ」という問いをもち、より良い学級を実現させるために、学級内で自主的に発信し合う集団になりつつある。そのため、このような世界に目を向ける学習を通して、同年代の命を守るために、自分には何ができるかと考え、考えを表現しようとする姿が期待できる。

こうした学習経験を通して、わかったこと、調べたこと、支援方法等を、より多くの人に知ってもらう必要性に気づくことができると考える。発信する中で、今ある生活が当たり前ではなく、有限性があるものであり、自分たちが主体的に創り出していくことが社会をより良くすることにつながるんだという思いが育つことを期待している。

（３） 指導観

普段から何不自由なく食事ができ、着る服があり、寒さや暑さをしのげる恵まれた環境下にいる児童だからこそ、絶対的貧困に苦しむ同年代児童の姿の存在を知ることにより、新たな視点を生むことができると考える。その際、同情意識が芽生えること、どこか遠い国の話であり、直接自分達に関係しないことだと感じることが少なからずあると考える。そこで、前学年までの既習内容である、食の連鎖や、輸入・輸出等を関連付けて、自分事として捉えるための支援をしていきたい。「私たちは、どうして学校に来ているのだろうか」や「学校に通うことが決められたのは、一体一体いつからなのだろうか」という大きな問いを児童に投げかけることで、「日本と同じように、他の国に住む子ども達も、学校に通っているのだろうか」という気づきを生み、就学率や識字率に目を向けていく中で、「教育を受けられる国」と「教育を受けられない国」の環境の違いを投げかけることにより、貧困の連鎖に気づかせたい。

その後、絶対的貧困に苦しむ子どもたちが置かれた状況には、一体どんな理由があるのだろうか、様々な団体が支援活動をしている成果はどれだけ出ているのだろうか、失われている命を今減らすことができているのだろうか等について調べていく活動を設定している。「学校に行けない子ども達の存在が、私たちの生活にどのような影響があるのか自分なりに結論を出そう」という投げかけから、児童はSDGｓ１７の目標の中から、自分なりの結論を出すためにそれぞれの考えに合った目標を選び、深化させていくことができると考える。

そうした活動を通して、小学校６年生である自分達ができることを考えさせていきたい。自分事にした内容であるからこそ、今の自分達の認識に不足していること、今の自分達に必要な学びとは一体何だろうかという視点も同時に育てていきたい。

学んできたことをまとめたり、発信したりする中で、最終的にもう一度自分に立ち返らせる活動を取り入れる。卒業しようとする今、これから経験していく様々な事象を、「当たり前ではない」という感覚で考えることができる視点を生み、常に自分に問い続ける人に育ってほしいと考えている。

＜この題材で働かせるESDの視点＞（見方・考え方）

多様性：日本では、国の支援が整っているため、子どもたちは安全に生きることができる。
当たり前だと思っていた生活が、当たり前ではないことに気づく。

有限性：同年代の子どもたちの中では、苦しい思いをして生活している事実がある。もし

かすると、世界の格差が広がり、世界平和が脅かされてしまうかもしれない。

責任性：世界中の子どもたちが安心して生きていくためには、気づき始めた自分たちが解決に向かう糸口を見つけ、実際に努力して行くことが大切だ。また、気づき行動する人を増やすことが解決への第一歩であるため、自分達の気づきを発信していかなければならない。

＜この学習を通して育てたい ESD の資質・能力＞

クリティカルシンキング：

何気なく過ごすこの毎日が当たり前の出来事に思っている。世界には様々な環境下に置かれた子どもたちがいる事実を知り、絶対的貧困の存在に気づく。

コミュニケーションを行う力：

世界中の子どもたちが安心して明日を迎えることができ、幸せに生きていくために、何が必要なのか、自分達ができることはあるのかについて考えを出し合い、話し合う。また、自分たちが思い描く「幸せ」が全てではなく、様々な「幸せの形」があることを知り、それら全てを尊重していくために何ができるかについて、考えを出し合う。

進んで参加する態度：

友達と考えを共有しながら、決めたこれから努力していくこと「SDGs 宣言」についてまとめる。その内容を隣接校や市だけではなく、日本以外の国の同年代の子どもたちに対して、調べてわかったことを発信しようとする。

＜本学習で変容を促す ESD の価値観＞

世代内の公正：自分たちの生活や行動が将来の盛大に影響を与えることを意識して、公正な社会を目指して自らの生活や行動を改善しようと考える。

＜達成が期待される SDGｓ＞

目標１　貧困をなくそう　　目標３　すべての人に健康と福祉を

目標１０　人や国の不平等をなくそう　目標１７　パートナーシップで目標を達成しよう

４．単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に取り組む態度
①　世界には貧困の中で生活している人々がいることに気付き、その背景や要因について調べようとしている。	①　世界における学校に行けない子どもたちの背景などに着目して、貧困の問題について考えている。 ②　日本との違いから課題を把握して、その解決に向けた自分の考えを表現できる。	①　学校に行けない子どもがいるという課題について、解決方法を構想したり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。

５．単元の指導計画（全 20 時間目）

主な学習活動	学習への支援	評価・備考
１.SDGs 学習を始める前に	「絶対的貧困」について児童に投げかけ、感じたことを出し合う。同年代の子どもたちの苦しみを知り、自分たちの生活、何気なくしている行動を再度見つめるきっかけづくりとして位置付ける。	知・技①
２.学校に行けない子どもたちの存在が、自分達の生活にどのような影響があるのか考えよう	識字率や就学率に目を向ける活動を通して、負の連鎖に気づかせる。「絶対的貧困」によって、教育を受けることができない子どもの存在を知り、自分達の生活と重ね合わせる。	知・技① 主① 思判表①
３.「世界における貧困に苦しむ子ども」について知ろう。 ４.探究する中で、必要なことを整理する。	SDGs について学びを深めていく中で、こんな人の話を聞いてみたい、支援をして成果が出ているのかという気づきにつながっていく。学級会を通じて、今の自分達に必要な学びを決め、自分達でアポ取りをする。	思判表②
５.同じ目標を選んでいる仲間と、自分が今まで調べてきたことを照らし合わせる。	実際にわかったことを出し合い、興味をもって調べてきたテーマについてどう解決していけるかについて話し合い、結論を出させる。（１１歳、１２歳である自分達が当事者として、その目標達成に向けて現実的に何をしていくか、何ができるかについてスライドにまとめる）	思判表①・②
６.「わたしたちの SDGs 宣言」をしよう。	「自分たちが実際に努力していきたいこと」「みんなに協力してほしいこと」について、ロイロノートを用いてスライド発表を行う。 ※発表対象はこの時点では、６年生である。全校児童、生駒市全体に発信していくことにより、自分の気づきや思いを発信していく。	思判表②
７．２学期に行った「SDGs 宣言」からの成果について、学年で共有する。	自分たちの学びを発信していくことが有効であること、気づきを与え続けることが、自分達の住むまち、県、国、世界を良くしていくことにつながるということに気づかせたい。	思判表②
８.同じ中学校区に進学する生駒小学校６年生に向けて、「わたし	同じ中学校で進学合流する仲間となる同年代の６年生に、努力していきたいこと、調べて学んだことについて発表し合う。	主① 思判表②

たちのSDGs宣言」を、オンラインで交流する。 ９.日本以外の同年代の子ども達と交流し、文化の違い、考え方の違いに気づく。 10. 「『幸せ』って何だろうか」について考える。	ネパールの小学生と話をする機会を取る。たわいもない話の中で、日本以外の子どもたちの様子、表情から気づきを発見する。 現地の子ども達の様子から、「自分達が考える幸せ」から、「幸せの形」を考える機会にする。 場所が違ったり、住んでいる環境が違ったりする中で、「楽しいと思うこと」「うれしいと思うこと」の捉え方が違いに気づいたオンラインから、様々な「幸せ（物理的・精神的な面）の在り方」があることに気づく。自分達が調べて、努力していきたいと考えた内容と照らし合わせる中で、「自分にとっての幸せって何だろう」と考えるきっかけにする。	

６．成果と課題

〇本実践の結果、次のような成果が得られた。

・当事者意識をもって学習に取り組む姿が見られた。
・今まで感じてきた「当たり前」が、場所や環境、人が違えば「当たり前ではない」ということに気づかせることができた。
・「絶対的貧困」について理解を深め、自分達に一体何ができるだろうかということを考えさせることができた。
・「幸せの在り方」について探究し、自分だけではなく世界中に生きる「みんなにとっての幸せ」を考える視点をもたせることができた。また、その視点からSDGs学習の必要性に気づかせることができた。
・自分達が学んだこと、感じたことを主体的に発信することができた。

「家族がそばにいる」「友達がいる」という目に見えない幸せ以外だけではなく、「お金をたくさん稼ぐこと」や「物がたくさんあること」等の目に見える豊かさが幸せにつながる、だから勉強しなければならないんだという児童の発言があった。これらのことから、「幸せの在り方」は置かれた環境によって違うことや、様々な捉えがあって当然であることに気づく必要があると考えた。

実際に、この実践を深めていく中で、「学校に行きたくてもいけない子ども達がいて、今も苦しい思いをもっている現実」を児童は知り衝撃を受けていた。このことから、恵まれた環境（安全で安心して過ごすことができる）である日本では、明日生きていくために

どうすれば良いかを考えなくても生きていくことができる、守られた存在だったということに気づいていった。同時にこれらの気づきが、自分たちの生活が当たり前ではなかったという多様性の視点につなげることができた。

調べ学習を重ねる中で、苦しい思いをした子ども達が増加していくことが、自分達に直接的に関係しないものの、時間をかかり、間接的に自分達の生活に影響してくることに気づいていった。これらのことを、知識として児童はもっていたが、どこか遠い世界の話で自分達に関係ないと思っていたとワークシートで振り返る児童が多かった。世界の格差がどんどん広がり、日本に住む自分達の平和そのものが脅かされてしまうことの有限性に気づくきっかけになった学習だったと思う。

これらのことを経験する中で、当事者意識をもちながら学習に取り組む姿が多くみられるようになり、この学習を通して身につけたかったESDの資質・能力である「クリティカルシンキング」や「進んで参加する態度」が見られるようになってきた。

また、自分たちの生活や行動が将来の世代に影響を与えることを意識して、公正な社会を目指して自分たちの生活や行動を改善する必要があると感じる児童が増えてきたことから、学んだこと感じたことを、誰かに発信したいという思いにつなげることができた。同時に、自分達が学んできたことを、この一年で完結するものと認識するのでなく、卒業した後も意識し続けることが大切になってくることに気づくようになっていった。

以上のことから、自分達の気づきをより多くの人に知ってもらうことが、これらの解決に向かう第一歩であるというESDの視点である責任性へとつなげることができた。発信する相手を考える学級会では、来年度、同じ中学校で過ごす隣接校の６年生や、自分達と違った環境で生きる海外の同級生に絞っていった。

オンラインを通じて思いを発信したり、「幸せの在り方」について意見交換したりする中で、児童は自分の価値観や考え方と比べることで、より良い生き方を考えるきっかけとなっていった。

〇課題としては、以下のことが挙げられ、今後の実践で改善していきたい。

この実践を通して、児童がESDの視点を意識しながら学びを深めることができた。

常に、授業者側の軸として大事にしてきたことは、「当事者意識をもって、学ぶこと」である。児童が「気づき、どうすれば良いか考え、そこから主体的に行動し、結果から、またどうすれば良いか考える」という学びのサイクルをこの実践を通して身につけさせたいことであった。

今回の実践を振り返る中で、児童が学んだことを発信する活動を学習計画の後半で設定してきた。学級会を何度も開き、他学級とも意見を交わす中で、児童と共に自分達の学びの終着点をどうしていきたいか話し合い、発信することを設定した。しかし、一度発信してしまった後、児童はやり切ったんだという感覚になってしまい、学びを意識させる当初の思いとは裏腹に、学びをストップさせてしまったように、振り返りを読んでいて感じ

た。発信以外にも、学びを深化、統合する方法がたくさんあったのではないかと感じる。

具体的には、発信してしばらく経った後に相手の心境や環境、考え方がどのように変わったのか把握する活動を取り入れたり、児童が発信後と発信前とでどのような変容が見られたのかをチェックする活動を取り入れること、また自分達の発信によって、自分達がどう変わったのか把握する活動を取り入れることが今後の課題して挙げられる。

また、「絶対的貧困」を知る活動をきっかけとして、最終的に「幸せ」について考えるという自分に還る活動を設定し、考える過程でSDGs１７の目標について触れさせてきた。いざ、調べ学習をスタートさせていくと、SDGsそれぞれの目標について調べ、わかったことをまとめるスライドづくりになってしまったグループが多かった。児童の様子や振り返るワークシートから判断すると、児童にとって、どこか「発表しなければならない」「発表があるから、まとめるのか」という認識が強く生んでしまったからではないかと考える。発信という流れは児童と共に決めてきたことではあるが、授業者である私が導く場面があったため、「発信」そのものが一つのゴールとして設定し、児童の主体的な学びを阻害してしまうことに繋がってしまったことがもう一つの課題として挙げられる。

このように、今回の実践を通した課題から、児童の「学び」とは一体何なのか、どうすれば一番子どもが変容し、主体的な学びのサイクルが生まれるのかわかっていなかった自分がいることに気づいた。「当事者意識」をもたせ学びをスタートさせる中で、「まとめる（発信)」という展開だけではなく、児童の様子や実態、学びの度合いから、学びの終着点を考えていかなければならないことに気づかされた。児童にとって、「やり切った」という感覚は大事であることに違いはないが、同時に学びを完結したと思わせてしまうことにもつながってしまうことも忘れてはならない。児童が学びを進めていく中で、「この考えや気づきが、SDGsのこの目標につながっていたんだな」という思いをもたせることが、主体的な学びの一助になっていくことにつながると考える。

小学6年

現在の学年終了時に目指す姿

世界には、学校に生きたくても行けない同年代の子どもがいることを知り、「世代内の公正」が保たれていないおかしさを考えると同時に、自分の生き方を能動的に捉えることができる。

物が揃っているという「幸せ」だけでなく、国や環境によって「幸せ」の捉え方が違うのかな。

「恵まれている」「命の危機に瀕していない」日本にいる自分達は満たされている…だからこそ「自分達はこれからどうしたいのか、どういう生き方をしたいのか」考えなきゃ…。

住んでいる場所や環境によって、みんなが思う「幸せ」って違うんだな。自分達のそばにも同じものはあるけど、そこに幸せを見出せていなかったな。

「お金がない」「教育を受けれない」でも、笑顔が多いのはなぜだろうか。「幸せ」ってどういうことをいうのだろうか。

総合的な学習の時間

「今ある生活を、当たり前と捉えない自分になろう」

〇主に養いたい ESD の資質・能力

クリティカルシンキング

何気なく過ごすこの毎日が当たり前の出来事に思っている。世界には様々な環境下に置かれた子どもたちがいる事実を知り、絶対的貧困の存在に気づく。

コミュニケーションを行う力

世界中の子どもたちが安心して明日を迎えることができ、幸せに生きていくために、何が必要なのか、自分達ができることはあるのかについて考えを出し合い、話し合う。

〇主に育てたい ESD の価値観

世代内の公正

世界には様々な環境下に置かれた子どもたちがいる事実を知り、絶対的貧困の存在に気づく。

社会科「つながりの深い国々のくらし」

ネパールについて調べ学習をする中で、生活や文化・習慣について理解する中で、「貧富の差」や「教育環境の違い」、「環境の違い」について気づくことができる。

日本との違いに気づく中で、「どちらが幸せか」と比べるのではなく、「自分達はこういう生き方をしていきたいという気づきにつなげる。

総合的な学習「就学率や識字率を調べる」

絶対的貧困の背景に、識字率や就学率がかかわっていることを知り、日本との違いを知る。

自分達の生活が恵まれたものであったことを再確認すると同時に、「なぜその貧困から脱出できないのか」「自分達だけ不自由ない生活をしていて良いのか」という疑問を抱く。

特別な教科 道徳「フーバーさん」（国際理解）

古来より様々な背景によって、築き上げられてきた日本の文化。諸外国でも同様な築き上げられ方をしているものであることを知る。

自分達がニュースや断片的な知識により、その国を理解できたつもりになっていたことに気づくと同時に、その国をよく知ろうとしたり、互いに尊重しようという意識をもつことが、国際理解への第一歩であることに気づく。

教育を受けられない子どもがいるエリアに偏りがあるのは、なぜだろうか。

総合的な学習「幸せって、一体何だろうか」

近隣校の同級生やネパール現地校の同級生に、自分達の学びを発信すると共に、「願い」や「自分達が考える幸せ」について聞く中で、考え方の違いや価値観の違いを実感する。

「自分達にとっての幸せって何だろうか」ということについて学びを深めようという思いに至る機会を得る。

社会科「戦争の拡大と大きく変わった人々の暮らし」

過去の日本では、戦時中・戦後の貧困により、子どもたちが苦しんできた歴史がある。戦後の復興は早く、現在、物質的な貧しさはほとんど表面化しなくなってきた。かつての時代で子ども達が感じる「幸せ」とは何か考えることから、現在の自分達が抱く「幸せ」との違いに気づく。

社会科「産業の発展と人々のくらし」

国力の充実を急ぐ国の施策により、「物質的な豊かさ」を優先し、人々の「心の豊かさ・幸せ」を蔑ろにしてきた歴史を再確認する。

単元を貫く視点：「幸福感」に焦点を合わせる

初めの捉えと比較する中で、自分の捉え方の変化に気づくことにより、自分の生き方を見つめることにつなげる